
ある日のインキュベーターたち

icsbreakers

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日のインキュベーターたち

【Nコード】

N2266V

【作者名】

icbreakers

【あらすじ】

魔法少女まどか☆マギカのマスコット(?)キャラ、『キュウベえ』とその仲間とのある日の会話。

オリジナルインキュベーターから始まるIFストーリー。

(前書き)

魔法少女まどか☆マギカの二次作品です。

物語は、まどか未契約で全員生還でワルプルギスの夜を倒したというIF設定で描いていきます。

本編ネタバレも含みますのでご注意ください。

「あつれ〜？ キュウベえ先輩じゃないっすかあ」

「ん？ 確かキミはゴンベえくんだったかな？」

ビルの屋上に白い小動物が2匹。

一見するとぬいぐるみのようだが、それらは当たり前のように動き回り、人の言葉で会話をしていた。

インキュベーター。

彼らはそう呼ばれている。

魔法少女という特異な存在の人間にしか見ることの出来ない生き物だ。

「いや〜、今日は暑いっすね」

今は7月。

日中は30度を越えることもあった。

「そんな涼しそうな顔してよく言うよ」

キュウベえは表情を変えることなく言った。

「人間たちはこういう時期に『暑い』ってよく言うじゃないですか

？だからオイラもそれに習って……ああ、暑い」

「人間観察も結構だけど、ちゃんと契約はとれているのかい？」

「ぼちぼちっすよ。こんな暑いんじややる気もなくなりますよー。
有給申請したいっす」

ゴンベえはゴロゴロと甘える猫のように地面を転がった。

キュウベえはその姿を見て溜め息をついた。

「そんなんじやその『新型』が泣くよ？」

「新型って言っても、この触角くらいなもんっすよ。あ、ちなみに人間のあいだではこれをアホ毛っていうみたいっすよ」

ゴンベえは耳の間に生えた触角をピョコピョコ動かした。

触角と言っても、毛で覆われており、先はくるくると巻いている。
尻尾をくつつけているかのようだ。

「キュウベえ先輩みたいに才能を見抜く力があれば一番ですけど、
オイラみたいな未熟者はコイツがないと効率が悪いんすよね」

「キミたちは量産型だからね。しかしキミは量産型の中でも異質だ
と思うよ」

「そうっすか？」

「キミの思考はどうも人間よりだ。まるで感情があるかのように感

じるよ」

「——そんなわけないっすよ。あったらこんな面倒なことしないでいいじゃないっすか。そんなことより……」

ゴンベえは下を見下ろした。

ちょうど下校時間らしく、たくさんの中学生が賑やかに歩いていた。

「誰か逸材いないっすか？たまには仕事しないと怒れちゃいますからね」

「その触角で探せばいいじゃないか。魔力が数値でわかるだろ？」

「それはそうですけど、なかなか良い娘は見つからんすわ。例えばあの娘とか——魔力……たったの5……ゴミっすね……」

「その触角はどれくらいの範囲まで探せるんだい？」

「そうっすねえ」

ゴンベえは触角をピンと上にあげ、巻いていた部分を真っ直ぐに正した。

「この状態でだいたい2、300メートルくらいですかね。通常時だと100メートルくらいっすね」

「へえ。意外と狭いんだね」

「そうなんすよ。だからなかなか良い娘見つけれないんすよお」

「……なら、良い娘がいるよ。もうすぐここを通るんじゃないかな？」

キュウベえはゴンベえの隣に座り、一点をみた。

「えっ！？なんすか、この魔力！！測定できないほどなんて！！」

ゴンベえの触角は震えだしたまま止まらず、狂ったコンパスのよう
に不規則に回りだした。

「感知したかい？すごいだろ？この力さえあればボクらの目的達成
に大いに貢献できるだろうね」

「あの娘……いったい何者なんすか？いち中学生にこんな魔力あり
えないっすよね？」

「まあ、いろいろね。どうだい？ボクの代わりに彼女と契約してみ
ないかい？」

「先輩が見つけたのに、なぜオイラに？」

「どうもボクは彼女に信用されていなくてね。ワルプルギスの夜と
いう切り札をもってしても契約できなかったよ」

キュウベえはやれやれと首をふった。

「手強い相手ってことっすね……」

「怖気づいたのかい？」

「いや……」

ゴンベえはニヤリと口元をゆがめた。

作り笑いとは到底思えない悪意に満ちた表情だった。

「久々に燃えてきたっすよ。何より、あの娘マジでオイラのタイプっす」

「やれやれ……どこまでが冗談かわからないね、キミは」

「へへ。ところであの娘の名前はなんて言うんすか？」

「彼女かい？彼女の名前は……。鹿目まどか、さ」

(後書き)

まどマギが好きでついにやっちゃいました。

気になる方がいましたら、一読ください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2266v/>

ある日のインキュベーターたち

2011年10月9日13時01分発行